海江田順三郎（鹿児島県日中友好協会名誉会長）逝去

動画リンク https://youtu.be/x7burvIYSvI

鹿児島市出身。1953 年、京都大学経済学部卒業。鹿児島の高島屋開発（通称タカプラ）1993 年~2007 年に社長を務めた。戦時中は佐世保市に勤労動員され，帰省中の 1945 年に鹿児島大空襲に遭遇、陸軍航空士官学校入学前に終戦を迎えた。機会を捉えて戦争体験を伝え平和への思いを語った。80 年代以降は鹿児島市と友好都市の中国・長沙市などとの交流に情熱を傾け、県と市の日中友好協会の会長を長く務めた。2014 年、終戦前後の混乱期に幼い残留邦人を引き取って育てた**中国人養父母に感謝する碑の建立**では主導的役割を果たした。

日中関係が悪化するたびに草の根交流と相互理解の大切さを説いた。鹿児島市教育委員長、鹿児島経済同友会福代表幹事なども歴任した。（以上・南日本新聞より）尚、（公社）日本中国友好協会（東京）理事も歴任。

海江田順三郎が残した両国の友好の証しは鹿児島市に多く残る。西郷南洲公園（墓地）内に勝海舟の秘と並んで桜島を臨んで建つ『中国の西郷』と呼ばれ、孫文らと辛亥革命を先導した長沙市出身の志士**黄興（こうこう）の記念碑**もそうである。

訃報を受け、県内の関係者からも別れを惜しむ声が相次いだ。

鎌田　敬鹿児島県日中友好協会会長は・・・・

「日中にとって大きな損失」10 年来、その揺ぎ無い平和主義の信念に触れて来た。「複雑な世界情勢だからこそ「日中友好が最大の安全保障」と言い切っていた。先代会長に学んだことは多い。海江田氏の近くにいて氏の話をいつも聞かされていた鎌田氏の記憶・・・「戦争って、いろんな理屈をつけますが、いい戦争とか悪い戦争とかないと思うんです。戦争ってのは避けなくちゃいけない、しちゃいけない事なんですね。ただ必ず「自衛のため」とか理屈をつけますけど、どういう理屈をつけてもせんそうしちゃいけない。

鹿児島県華僑総会の楊忠銀会長は・・・・

全く威張らない穏やかな人、「こころの支えが亡くなった」と悲しむ。『中国への理解が深く、県内の残留孤児関係者も『海江田さんがいればこころ強い』と話していた。間違いなく民間交流の架け橋だった。と声を落とす。

日中交流 草の根貫く

海江田順三郎さん死去

空襲体験、平和の語り部に

5日に97歳で亡くなった海江田順三郎さんは、高島屋開発（鹿児島市）の社長として天文館の発展に努める経営人の顔とは別に、もう二つの顔があった。日中友好協会として両国の民間レベルの交流拡大に尽力。郷里が地獄絵図と化した80年前の鹿児島大空襲の語り部としては、平和を願う強い気持ちを訴え続けた。（1面参照）

県や市の日中友好協会長を長年務め、43年を迎える鹿児島市と中国・長沙市との友好都市締結の架け橋、日本語支援や市民との交流の機会を提供、尖閣問題などで両国関係が冷え込むたびに、政治に左右されない草の根交流や相互理解の大切さを説いた。

海江田さんが残した両国の友好の証しは鹿児島市内に多く残る。太平洋戦争後の混乱で中国に取り残された残留邦人の「中国人養父母」に感謝する碑や、「中国の西郷」とも呼ばれ、孫文らと辛亥革命を先導した長沙市出身の革命家黄興の「記念碑」がその例だ。

市民2千人以上が犠牲となった1945年6月17日の鹿児島大空襲では、自宅に無数の焼夷弾が直撃し、多くの人々と共に火の海を逃げ惑った。戦争末期の空襲を「地獄絵図のよう、今でも夢に出てくる」と語っていた。幾度となく生々しい戦争体験談を伝え、郷土が二度と戦火にさらされることがないよう最晩年まで願い続けた。（江口浩司）

鹿児島市日中友好協会総会で中国人留学生とあいさつする海江田順三郎さん（左から2人目）＝2002年、同市中央町

タカプラ閉館の際、見送る市民らに手を振って感謝する海江田順三郎さん（左）ら＝2018年2月12日、鹿児島市千日町

天文館の発展に貢献

県関係者、悼む声相次ぐ

5日に亡くなった海江田順三郎さんは、経済人として天文館地区の発展に尽力し、訃報を受け、県内の関係者からは別れを惜しむ声が相次いだ。

「日中にとって大きな損失」。鹿児島県日中友好協会の鎌田敬会長(72)は10年来、その揺ぎない平和主義の信念に触れて来た。「複雑な世界情勢だからこそ「日中友好が最大の安全保障」と言い切っていた。先代会長に学んだことは多い」と語る。

鹿児島華僑総会の楊忠銀会長(88)は「全く威張らない穏やかな人。心の支えが亡くなった」と悲しむ。残留孤児のための記念碑建立に触れ、「中国への理解が深く、県内の残留孤児関係者も『海江田さんがいれば心強い』と話していた。間違いなく民間交流の架け橋だった」と声を落とす。

鹿児島大空襲の語り部でもあった海江田さん。日中友好都市の鹿児島市と中国・長沙市との交流活動を通して知り合った鹿児島市の作家郷原茂樹さん(81)は、太平洋戦争を題材にした近著を執筆中に取材した。「竜が走るように山形屋前を焼け落ちた」と語る姿に、焼夷弾が市街地を焼け尽くす情景がリアルに浮かんだ。国防を義の信念に触れてきた。「複雑な世界情勢だからこそ「日中友好が最大の安全保障」と言い切っていた。先代会長に学んだことは多い」と語る。

鹿児島華僑総会の楊忠銀会長(88)は「全く威張らない穏やかな人。心の支えが亡くなった」と悲しむ。残留孤児のための記念碑建立に触れ、「中国への理解が深く、県内の残留孤児関係者も『海江田さんがいればこころ強い』と話していた。間違いなく民間交流の架け橋だった」と声を落とす。

鹿児島市日中友好協会（RC）の活動に積極的に関わった。50年近く親交のあるワールドサンフーズ（鹿児島市）の川原幾雄会長(76)は「鹿児島市で10番目のRCを設立したあの日を忘れない」と振り返った。（上岡毅、寺師周平）

◆鹿児島市で小屋5棟など全焼　5日午後0時40分ごろ、鹿児島市大迫町の資材置き場から出火、プレハブ小屋4棟計36平方メートル、トラック1台を全焼、家電や木材などの廃材約1300平方メートルを焼いた。鹿児島西署によると、けが人はおらず、管理者は調査中。近隣住民が110番し

巡る日中関係が不安な今だからこそ、もう一度語ってほしい。

県内経済の活性化や人材育成にも力を尽くし、青年会議所や ロータリークラブ

南日本新聞